

離島での僻地医療を肌で実感

五島列島で5日間の実習

離島での僻地医療を実際に体験してみよう——。長崎大学薬学部は2007、08年度の2年間、旧4年制課程の4年生約80人全員を対象に、一部は医学部の学生と共同で、長崎県西部の五島列島において5日間の実習を行った。離島では、住民と医療従事者の距離が近いこと、医療の人材が不足していること、医療・保健・福祉が一体となって住民の健康を支援していることなどを、薬学生たちは肌で実感したようだ。実習後のアンケート調査では、離島や僻地を将来の勤務地として考慮する薬学生の比率が高くなったという。6年制課程に学ぶ現在の4年生が、6年生になる11年以降にも、同様の実習を行う計画だ。

長崎大学薬学部

長崎市から西に約100km離れた沖合に浮かぶ五島列島。細くなめらかな五島うどんや、からすみなどの特産品でも知られる自然豊かな島々だ。

五島列島での実習期間は、月曜日から金曜日までの5日間。うち3日間は医学生と共同だ。薬学生は日曜日に長崎市内をフェリーで発ち、3～5時間かけて五島列島に到着。4人が1つのグループとなって、上五島と下五島の各コースに別れ、民宿や長崎県の独身寮で寝起きしながら、離島での医療の実感を体験した。

離島実習の内容は幅広い。地域の中核病院や診療所、薬局、役所の健康福祉課や健康政策課、保健所、社会福祉協議会をめぐる。「離島の特徴だが、それぞれの施設は近接しており、効率的に回ることができた」と長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授の塚元和弘氏は振り返る。

薬学生にとって特に印象に残った実習の1つが、上五島コースの学生が08年度に経験した出張診療所での実習だ。医療空白地を埋めるために、有川病院の医療スタッフが定期的に太田診療所へと出向き、診察を行っている。

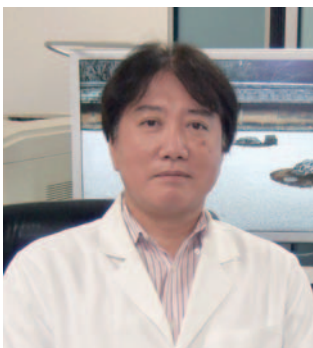
また、各施設での実習を通じて薬学生は、患者や住民と医療従事者との距離の近さ、コミュニケーションの深さを実感できたという。

「薬局が地域の交流の場となっているのが新鮮だった」「患者さんが薬剤師に対して、薬のことだけでなく、世間話や最近の自分の体調のことをよく話していた」などの感想が、薬学生からあった。

さらに、グループホームの実習や訪問介護への同行では、高齢者への接し方や介助のやり方を学んだり、半身麻痺を疑似体験したりするなど、介護・福祉分野を体験。「従来、薬学部ではこの分野の実習はあまりないだけに、学生にとっても新鮮だったのでは」と塚元氏は話す。

このほか、訪問健康相談、転倒予防教室、1歳半健診など、住民の健康を支援する行政

薬局が「交流の場」に



塚元教授

午前中は有川病院で準備。午後から医師、看護師、栄養士に同行して太田診療所に向き、医師の診察、看護師の処置、栄養士の食事指導などを見学しつつ、患者に服薬指導を行った。

薬学生からは「本当にDr.コトーの世界で衝撃だった。診療所内は患者さんとの距離がすごく近くて、いい雰囲気だったことに驚いた」「できるだけ島の住民全てに医療を提供したいという思いを感じた」「栄養士が同伴することに少し驚いた。チーム医療がしっかりと行われていると感じた」などの感想があったという。

上五島病院、五島中央病院における実習でも、小舟に乗って近隣の島へ往診する医師に同行できた薬学生や、東に約100km離れた拠点病院まで、患者を救急ヘリで搬送する場面に立ち会えた薬学生がいるなど、離島ならではの経験を積むことができたようだ。



医学生と薬学生が講師となって地域住民への健康講話を行った

の活動に加わった。

下五島コースの薬学生は、住民に対する「健康講話」の講師も務めた。骨粗鬆症や糖尿病についての疾患の説明は医学生が、薬物治療の解説は薬学生が担当。いかに専門用語を使わず、分かりやすく伝えるかに知恵を絞ったという。

保健所の実習では、食品検査、水質検査、廃棄物対策など、公衆衛生に広く関わってい



患者を救急ヘリで搬送する場面に立ち会えた薬学生もいた



デイサービスの現場で、利用者と一緒に体操やゲームを行ったり、入浴後に髪を乾かすの手伝ったりして、介護保険制度への理解を深めた

ることを学習。薬学生からは「保健所での薬剤師の仕事が、あれほど多岐にわたっているというのには驚いた」との声があった。

学生の意識に変化

五島列島での実習は、学生に意識の変化をもたらしたのか。薬学生へのアンケート調査で、「将来、離島に定着して働きたいと思うか」について、「絶対働きたくない」（1）から「ぜひ働きたい」（7）まで、7段階で意思を表明してもらった。07年度は、5以上の意思を示す学生の割合は実習前の13%から、実習後は31%に増加。08年度は実習前の15%から実習後は19%に増えた。

「将来、離島で勤務したいと思うか」という問いには、5以上の意思を示す学生は、07年度は実習前の16%から実習後は34%に、08年度は17%から31%に増えた。

「すぐに離島や僻地での就職者が増えるわけでもないが、この実習を続けていくことで、離島や僻地も意外に悪くない、患者さんの生活に密着した医療ができると考える薬剤師が増え、定着する人が増えたらいい」と塚元氏は強調する。

長崎大学薬学部は、6年制課程（定員40人）に学ぶ現在の4年生が、6年生になる11年以降にも、同様の実習を行う計画だ。五島列島で約1週間、長崎大学病院の内科病棟実習で約2週間、同院の感染制御センター・がん化学療法センターで約1週間の合計約4週間の高次実習を予定している。

五島列島での実習は、長崎大学の医学部が04年度から先行して実施してきている。将来は、薬学生のほか、歯学生、看護学生も加わった体制になる見通しだ。離島が多い長崎県ならではのユニークな実習としてばかりでなく、医療過疎地域での薬剤師教育と供給を行う模範的なモデルとして、全国に発信していきたい考えだ。